

〈研究論文〉

日中翻訳の特異性 —観光資料の日中翻訳に基づいて—

宮 偉

【要旨】

翻訳には、共通性がある一方で、特定言語間翻訳の特異性もある。そして、この特異性に対する研究は、特定言語間翻訳における特有なリスクを予見し回避することに寄与できる。本研究では、観光資料の日中翻訳例を取り上げ、同文同種という言語的・文化的同一性の錯覚が日中翻訳の特異性であることを指摘する。この錯覚は翻訳者の持つべき警戒を緩め、日中翻訳を他言語間翻訳より困難にしている。そのため、日中翻訳にはより真剣な態度で取り組む必要があり、よく研究した上で訳出するという「研訳法」が適していると主張する。

キーワード：日中翻訳、特異性、同文同種、研訳法

1. はじめに

翻訳実践は、言葉の通じない民族間・国家間の交流に不可欠なため、人類有史以来の活動であると言えよう。長い歴史を有している翻訳実践に対して、翻訳学の歴史はまだ浅い。ジェレミー・マンデイ（2012:10）が指摘しているように、「翻訳の実践は長く定着してきたものの、翻訳の研究が学術分野に発展したのは、せいぜい 20 世紀後半になってからのことである」。歴史こそ浅いが、一つの独立した研究分野として確立されてからの翻訳学は、目覚ましい発展を遂げており、そして、その研究は、ヨーロッパをはじめとする西洋が中心となっている。言語学志向・等価理論・機能主義的翻訳理論・システム理論・文化的転向など主要な翻訳理論は、殆どヨーロッパから提唱されてきた。中国にしても日本にしても、翻訳研究は、ほとんど中英間翻訳、日英間翻訳の研究に集中していることはその証左となっている。翻訳研究が盛んな中国の例で見てみる。中国学術情報データベース（China National Knowledge Infrastructure, CNKI）で、「英中翻訳」と「日中翻訳」でそれぞれ検索すると、学術誌掲載論文は「英中」は 8912 本もあるのに対して、「日中」はわずか 327 本と、その差は歴然としている。

翻訳は、どの言語間の翻訳にしても翻訳としての普遍性があり、その意味で日中翻訳は、英中翻訳や英日翻訳の研究結果から示唆を得ることができる。一方、特定の言語間翻訳には、

その言語間翻訳にしか見られない特異性があることも見逃すことはできない。その特定の言語間翻訳の特異性に対する研究は、そこに生じる潜在的リスクを予見し、翻訳をより良いものにするために寄与できると思われる。

本研究では、日本語と中国語間の翻訳、すなわち日中翻訳だけに見られる、他言語間翻訳とは異なる特異性について論じる。

2. 先行研究と本研究の位置付け

日中翻訳は、CNKI の検索結果から見る限り、ほとんど事例研究を通しての日中翻訳のストラテジー・技法に対するミクロ的研究に集中している。無論、このような個別的な考察はいずれも日本語と中国語、或いは日本文化と中国文化の違いに基づき、示唆に富んでいることから、日中翻訳の特異性に対する体系的考察にもつながると言ってもよい。

そのような中でも、比較的マクロ的視点からの研究は、散発的に存在する。

敬 (1980:51-56) は、漢字・仮名が併存するという日本語の表記上の特徴、漢語が多いという日本語語彙の構成、受身文や長文の多用という日本語文の特徴など、日本語の特徴からみる日中翻訳の難点や解決策を、自身の翻訳実践を踏まえて述べている。

鐘 (1996:64-68) は、特に日本語及び日本文化の曖昧性や日本語の直感的思考様式という、日本語や日本文化の特異性による日中翻訳の問題点を指摘している。

唐 (2006:103-104) は、漢字がもたらしてきた日中翻訳における錯覚や、論理的思考と直感的思考という中国と日本の思考方式の違いからくる日中翻訳の難点を簡潔にまとめている。

以上の先行研究は、日本語や日本文化の特異性から日中翻訳の難点や取るべき技法等を指摘した点で示唆されるところは多い。しかし、異文化コミュニケーション行為である翻訳の本質という視座に立った、日中翻訳の特異性に対する系統的考察という点からは、未だ検討する余地があることも窺える。

翻訳は、言語記号の転換を手段としているが、言語間の一対一対応の置き換えではない。言語は、言語使用者の世界に対する独特な切り取りであり、世界観、価値観や人生観の反映でもある。言語が異なると、それぞれの指し示す内容にも多少ずれが生じるため、完全な意味的等価はあり得ないと言ってよかろう。それにもかかわらず、言語差は同じ指示対象に対する命名差にしかすぎず、翻訳は一つの命名集から同等に存在する他の命名集に置き換えるだけの作業であると一般的に思われがちである。そして、翻訳に対するこの誤った認識は、翻訳の従事者にもよく見られる。

翻訳は、異なる言語文化間の交渉であるため、目的のある異文化コミュニケーション行為でもある。異文化コミュニケーションには、数多くの困難がある中、言語と文化の差異が最も大きなハードルになっている。そして、その差異は、顕在的差異よりも潜在的差異が問題だと思われる。目に見えない潜在的差異が原因で、異文化コミュニケーション時に持つべき

緊張感が緩み、うっかりすると取り返しのつかないミスを起こす恐れがあるからである。翻訳、特に近接関係にある言語間翻訳に、似て非なる言語的・文化的現象による潜在的差異が見逃される現象が多く見られる。許（2009:140）は、翻訳におけるこのような似て非なる言語的・文化的現象を「偽友達」と言い、その危険性について、次のように指摘している。

言語が近くなるほど、逐語訳が取られがちになる。近接言語間のいわゆる「偽友達」現象により、言語間の差異に対する翻訳者の持つべき警戒が緩み、言語間の細やかながらも質的に異なる差異が無視され、原文の意味が訳文の中で十分に伝達することができない結果を起こしてしまうことがある。¹

同文同種とまで言われる日中両言語間の翻訳は、似て非なる言語・文化上の「偽友達」による問題が、日中翻訳の現場において最も大きな問題となっている。

本研究は、理解と訳出という二つのプロセスがある翻訳における言語と文化の対応という二つの側面に即し、主に日本の観光関連資料の中国語翻訳に見られる問題点を例に挙げ、日中翻訳だけに見られる言語的・文化的特異性、すなわち似て非なる言語文化現象に焦点を当て、比較的マクロ的な視点から論じることにする。

3. 言語面から見る日中翻訳の特異性

3.1 漢字による問題点

日本語は、和語・漢語・外来語・混種語という語種を持ち、また、漢字という表意文字と、片仮名・平仮名という表音文字が同居している、世界にも類を見ない独特な言語である。日中両言語間において、他言語と比べて大きな特徴の一つは、漢字と漢語を共通して使用されることである。

漢字と漢語は、日本人の発明による片仮名・平仮名という表音文字が誕生されてからも、そして、明治時代以来の制限を経ても依然として使用され続けている。現代日本語における漢字使用数は、日本の文化庁が行った『漢字出現頻度数調査（3）』（文化庁、2007）から窺うことができる。当該調査の「第1部調査」の頻度表に出現する漢字は8576字ある。また、漢語・和語・外来語・混種語という日本語の語種については、『新選国語辞典』（第8版、2001年）によれば、一般語における漢語の比率は49.1%で、和語の33.8%と外来語の8.8%、混種語の8.4%を超え、日本語・日本人の生活における漢語の揺るがない地位を示している。

しかし、日本語に使用されている漢字と漢語は、中国語の漢字と漢語と同じではなく、「偽友達」とも言える一面がある。鈴木（1975:52）は、日中漢字の違いについて、次のように指摘している。

表記の素材としての漢字は、大部分が中国伝来のものであり、今なお共通のものも少なくないが、日本語の中に取入れられた漢字はすでに機能その他の点で、中国語の漢字からは独立した別個のものとなっており、むしろ全く関係がないと考えるべきである。

漢字からなる漢語は、日中間で共通して使用されているものが多いが、意味的に異なるものがほとんどである。そして、日中翻訳においては、文字の表記は同じでも意味はある程度異なるという日中同形語による問題が多くみられる。

日本の観光関係の日中翻訳実例を挙げてみる。

例 1

原文：江戸城の中心部である内堀に囲まれた内郭は、本丸・二丸・西丸・吹上御殿などから構成され、本丸・二丸・西丸にそれぞれ御殿があった。本模型は、このうち本丸御殿・二丸御殿の幕末期における様子を1/200で復元したものである。

原訳文：江戸城中心护城河环抱的内部由本丸、二丸、西丸、吹上御殿等构成、本丸、二丸与西丸都有各自的御殿（府邸）。本模型是根据幕府末期的本丸御殿与二丸御殿以1/200的比例还原而成的。

例 2

原文：その後、寛政の改革のなかで出版の取締りは一段と強化された。改革政治を風刺した黄表紙類の発禁が命ぜられ、さらに葛屋重三郎版、山東京伝作の洒落本三部が絶版となった。

原訳文：在其后的寛政改革中、幕府更加强化了出版取缔。讽刺改革政治的黄表纸类书籍被明令禁止，以至于由葛谷重三郎出版、山东京传著的洒落本三部曲成为绝版。

例 3

原文：江戸時代の将軍は、幕府の首長として諸大名に所領を安堵する一方、所領の石高に応じた軍役や「御手伝普請」など公儀による土木・建築を負担させた。

原訳文：江戸时代的将军作为幕府的首脑，允许下属诸大名拥有各自领土，并依据领土收获量（以石表示）承担军役，或根据“御手伝普请”等制度承担土木、建设等幕府规定的职责。

以上3例は、東京都某博物館に見られる日中対訳の実例である（下線は筆者による）。これらを見てわかるように、「本丸・二丸・西丸・黄表紙・洒落本・御手伝普請」などは、いずれもそのままの形で中国語に借用されている。しかし、「丸」は日本語の中では「城郭の内部」²の意味があるのに対して、中国語の「丸」にはその意味が全くない。「黄表紙」、「洒落本」や「御手伝普請」は日本独特のものやことを表す漢語であるが、中国語にはその漢字の組み合わせさえもない。「取締」は、日本語では「不都合や違反行為がないように監督（監視）する」の意味であるのに対して、中国語での意味は「取り消し或いは禁止することを厳しく命令す

る」の意味であり、日中間の意味においては部分的にしか重なっていない。このように、日中翻訳の現場では、意味的に全く異なるか部分的にしか重ならない漢語が、そのままの形で借用されている現象はよく見られる。

同形語に対するこのような翻訳上の対応は、決して個別的な現象ではない。筆者が考察してきた東京都と千葉県にある博物館の解説パネルの日中対訳では、他にも「天守閣・旗本・町屋・御用達・呉服・双六・初物」など、特に文化事項を表す、いわゆる「文化語彙」の中国語翻訳に、同形語がそのまま中国語に借用される傾向が見られる。無論、このような翻訳は、訳文の受容者としての中国人読者の理解不能、或いは誤解を引き起こし、ミスコミュニケーションを招くことは十分想定される。

3.2 「同形語」の定義及び種類

施 (2013:4) によると、中日国交正常化および中国の改革開放以来、同形語に対する研究は盛んになり、2013 年現在、中日両国で発表された同形語関係の研究成果が 300 点以上にも上っている。しかし、同形語の定義や分類に関しては必ずしも一致したものは見られない。

日中同形語の定義について広く引用されているものは、以下の大河内 (1992: 179-180) である。

同形語（中国語で“同形詞”）とは何か。一言で言えば「政治、文化」のように日・中で字面が同じ単語であるが、この呼び方が中国でつかわれだしたのは比較的最近のことのように思う。もちろん日本での呼び名は中国語を受けている。概念の定義は違うが、従来“日語借詞”と呼ばれてきたものが主としてこれに相当する。これを拡大して、この“日語借詞”と古来中国語にある語（同じようにいえば日本における漢語借詞）とを合わせ、いずれがいずれを借用したかを問わず、双方同じ漢字（簡体字は問わない）で表記されるものを同形語と呼ぶようになったと思われる。

この定義は広く認められているが、それを補う形として、潘 (1995:19-23) は、日中同形語の認定を以下の 3 条件にしている。

- a. 表記が同じ漢字（繁簡体字の区別や送り仮名、形容動詞の語尾など非漢字的要素を無視する）
- b. 共通する出所や歴史的関連がある
- c. 日中両言語で現在使用されている言葉

さらに、施 (2013:5) では、コーパス作成の立場から、「中日同形語は中国語と日本語における、お互いに借用関係のある、歴史上同じ漢字で表記された漢語である」と定義されている。

本研究では、日中翻訳の立場から、潘 (1995:19-23) で挙げられた 3 条件の a を満たす漢語を、同形語と認定する。理由としては、例 1~3 を見てわかるように、日中翻訳の現場では、

漢語の出所や歴史関連或いは中日両言語における現在の使用状態とは関係なく、ただ表記が漢字であるという理由からそのまま目標言語に借用される現象が、多いからである。

同形語の種類については、意味上、同形同義語と同形異義語に大別することができる。

同形同義語は文字通り、同形であるとともに意味も同じである同形語を指す。雷(2010:113)では、「新年・印象・地震・方程式・参加・学校・作家・電話・移動・図書館・国際・会議」などを例に取り、「同形同義語は主に動植物の名称、科学技術用語などに集中しており、また日常生活と密接な関係にある言葉もある」と指摘されている。

同形異義語は、同形でありながら意味が異なる同形語を指している。王(1998:143-152)は、日本の『三省堂現代国語辞典』(1988年)、『旺文社国語辞典』(1986年)、『日中辞典』(1992年)などの辞書から、192個の同形異義語をリストアップし、同形異義語を、異義の程度により次のように分類した。

- a. 完全に意味の違う場合(74%)
 - b. 同じ意味を持つが、中国語にはほかの意味がある場合(18%)
 - c. 同じ意味を持つが、日本語にはほかの意味がある場合(5%)
 - d. 同じ意味を持つが、それぞれにほかの意味がある場合(3%)
- (括弧内は同形異義語に占める割合)

以上を踏まえ、本研究では、日中翻訳の立場から、同形語を、同形同義語と同形異義語に大別し、そして、同形異義語については、王(1998)の種類 a を同形完全異義語とした上、b・c・dを一括りにして同形部分異義語とする。

以下では、同形同義語、同形完全異義語と同形部分異義語の順で、日中観光翻訳に見られるそれぞれの問題点を見てみる。

3.3 同形同義語

同形同義語の存在は、日中翻訳や日中交流をより容易にしているのは事実である。在中国日本国大使館の垂秀夫大使が着任挨拶で言及された「日本の近代化の幕開けとなったペリー来航の際、一行に加わっていた羅森という中国人」が、垂大使のおかげで中国でも注目を浴びようになっている。日本語の分からない羅森が通訳として日米の通商協定締結に加わることを可能にしたのは、200年前の特に公式文書において日中両国が共通に有する漢文の使用や、同形同義語のおかげでもあると思われる。また、日中両国がそれぞれ大きな変化を遂げた今日、お互いの言語が全くわからなくとも、漢字による筆談を通じてある程度のコミュニケーションが取れるのは、同形同義語を持つ日中両国だからこそのことであろう。

しかし、同義には程度がある。というのは、言葉の意味には、概念的意味以外に、中村(2002:3-50)が指摘するように、文体的意味・感情的意味・文化的意味等周辺の意味・連想的意味もあるからである。言語間においては、たとえ言葉の概念的意味が同じでも、周辺の意味が異なる場合はほとんどである。同形同義語で言う同義は、辞書に書いてある意味、つまり、概

念の意味においてのことである。言葉の周辺の意味・連想的意味となると、多かれ少なかれ意味のずれは存在する。「新年」は日中両言語のどちらにもある漢語で、そして、一年の始まりとして祝う日であるという意味は共通しており、すなわち同形同義語である。しかし、中国語の「新年」は旧暦の1月1日を指すのに対して、今日の日本では「新年」とは新暦の「元旦」を指す。当然のことながら「新年」に伴う風俗習慣も考え方も異なる。この例からも分かるように、日中間にあるいわゆる同形同義語には、完全な意味的等価がありえないと言っ
ていいほどである。

このように、同形同義語と言っても、その言葉に伴う語感などは日中間で異なる。それを看過してそのままの借用は、文化的誤解を引き起こすことにもなるため、翻訳時には何かの形で情報の補足やずれへの修正が求められる。同形同義語に対しても、翻訳者としての警戒を緩めることはできない。

3.4 同形完全異義語

王(1998:143-152)の研究によると、同形異義語における同形完全異義語は約8割を占めているという。本研究では、同形完全異義語に、「手紙」のような、日中両言語のどちらにも使われているが、意味が全く異なる漢語だけでなく、「洒落本」、「御手伝普請」のような、日中どちらか一方でしか使用されていない漢語をも検討の対象とする。

日中翻訳では、同形完全異義語に対する誤訳例が、以下の例で分かるように、数多く見られる。

例4

原文：寛文6年(1666)に建立されたこの寺院には、約2万体を数える石の地藏が並んでいます。旧暦の8月15日には「へちま供養」が行われます。

原訳文：建于寛文6年(1666年)的该寺院里，供放着约2万尊石刻地藏菩萨。农历8月15日举办“丝瓜供養”。

例5

原文：幕府は、中国の文物や情報を得るために、琉球が中国(明・清)と冊封・朝貢関係を結ぶことを黙認した。

原訳文：另一方面，为了得到中国的文物和讯息，让琉球与中国(明朝、清朝)继续保持朝贡关系而迎接册封使。

例6

原文：それまで公家や武家の儀礼であった子供の成長を祝う行事がこのころ民間に普及し、大切に育てるための育児や教育書が数多く刊行された。

原訳文：此前流行在公家及武士家庭中的儿童成长庆祝仪式也逐渐在民间得以普及，并且出现了大量旨在培养儿童的育儿与教育方面书籍。

以上3例は、それぞれ東京都のある区の総合ガイドブック、千葉県某博物館と東京都某博

博物館の解説パネルにある日中対訳例である（下線は筆者による）。

「供養」は、王（1998:152）の研究で取り上げられた「完全に意味の違う」、つまり「同形完全異義語」の中の一例でもある。日本語の「供養」は、「仏前や死者の霊前に有形・無形の物を供え、加護を願い冥福を祈るための祭事を行うこと」であるのに対して、中国語では、「老いた親・人を養う」の意である。

日本語の「文物」は、「一国の文化が生み出したもの。芸術・学問・宗教・制度などを含めた一切のもの」の意であるが、中国語の「文物」は、「古文化遺跡、古建築物、古図書や古い芸術品・生活用品等のような、保存され或いは発見された歴史文化遺物である」。

日本語の「公家」は、江戸時代の「天皇」と「将軍」の二重権力構成による呼称で、「(武家に対立する存在としての) 朝廷」である。しかし、中国語の「公家」は、「国家、機構、団体などを指す」の意である。

以上の例は、いずれも同形でありながら完全に意味が異なる、いわゆる同形完全異義語であるにもかかわらず、全く同義のように処理され、中国語訳文にそのままの形で使用されている。このような例は、日中翻訳には決して少なくはない。同形が故に同義であろうという漢字に対する親近感に起因する問題である。日中翻訳だけでなく、日中交流に潜んでいる最も大きな危険は、このような曖昧で漠然とした親近感にある。そしてそれが見えない形で日中間のずれを増大させていると言っても過言ではない。

3.5 同形部分異義語

日中翻訳の現場で、最も問題になるものは、同形でありながら部分的に意味が異なる、いわゆる「同形部分異義語」であろう。

観光施設によく見られる「18歳以下無料」を例に取ってみる。日本語での「以下」は、「数量に関する表現としては厳密にはその数量を含む」の意であるため、18歳も無料の対象になる。しかし、中国語での「以下」は「位置、順位或いは数字はある点より下」で、18歳は対象にならないという認識が一般的である。「以下」をそのまま中国語に移植すると、混乱を来すことになる。

東京都某博物館の解説パネルにある例（下線は筆者による）を見てみよう。

例7

原文：将軍は、正式には〈征夷大將軍〉という。古代においては東北地方の蝦夷を征討するために、朝廷が臨時に派遣する軍隊の総指揮官をさしたが、のちには征夷の意味がなくなり、幕府の首長たる武家の棟梁に冠される職名となった。

原訳文：将军的正式名称为“征夷大將軍”。原指在古代为了征讨东北地方的虾夷，朝廷临时派遣军队的总指挥官，之后其征夷的意味不复存在，成为了幕府之首、武家栋梁的官职。

例 8

原文：身分や性別にかかわらず国民すべてに教育の機会を与える「学制」は、近代国家の出発にふさわしい画期的な教育制度であった。東京府は当初、1260校の公立小学校の設置を決定したが、1873年（明治6）ころにはまだ60校足らずにすぎなかった。

原訳文：不问身份、性別，赋予全体国民教育机会的“学制”，是符合起步期近代国家国情的教育制度，具有划时代的重要意义。东京府起初决定开办1260所公立小学，而到1873年（明治6年）为止，设立的小学还不足60所。

「棟梁」は、日本語では「㊦大工のかしら。㊧国政をささえる重臣。㊨統率者」の意であり、つまり、組織のリーダーであるという意味が強い。それに対して、中国語では「国家の重責を担う立場にある人の例え」の意であり、必ずしも頂点に立つ人でなくともよい。また、「学制」は、日中間で共通している「学校教育に関する制度」という意味以外に、日本語では「1872年（明治5）に制定された日本で最初の近代学校制度に関する規定」（『広辞苑』第7版）という日本独特な、歴史的文化的意味がある。例8では明らかにこの「規定」のことを指している。「棟梁」や「学制」のように、日中間で部分的にしか意味が重ならない同形部分異義語に対するそのままの借用は、訳文受容者の誤解を招くことになる。

以上、同形同義語、同形完全異義語、同形部分異義語について考察してきたが、日中観光翻訳の実例を見てわかるように、日中翻訳の現場では、同形語の種類を問わず、同形が故に意味の区別をせずに、無理にでも中国語に借用される傾向が見られる。

日中両言語にある漢語は、それぞれ異なる歴史文化的環境下にあるため、同形であっても、同義とは限らない。日中観光翻訳では、特に日本の歴史や政治制度、官職名、風俗習慣、文芸、宗教などを表す言葉、例えば「御手伝普請・老中支配・若年寄支配・譜代大名・大番・书院番・小姓組・新番・小十組・寺社奉行・町奉行・双六」のような文化語彙は、ほとんど漢字で表記され、日中言語間では同形語となる。しかし、このような同形語は、中国語にない漢語か、あっても意味がある程度異なるのが一般的である。そのままの借用は、理解不能や誤解を引き起こすことになる。全ての種類の同形語に対し、日中翻訳時には十分に注意して対応する必要があると思われる。

しかしながら、漢語の共有は、日中間だけにある言語的現象であり、日中間の漢語の行き来を拒否するべきではない。歴史的に見ても分かるように、日中間における漢語の交流は止まることはない。そして、それは中国から日本へと一方的な輸入だけではない。特に明治時代には、西洋の文物を受容するために日本によって作られた、いわゆる和製漢語が、中国へ逆輸入され、現代中国語に完全に定着するという歴史もあった。また、近年、日本のポップカルチャーの普及により、「親子・人気・職場・御宅族・腐女」等も中国に伝わり、特に中国の若者に好まれている。日中間の漢語の交流は、日中両言語を活性化し、日中文化の相互理解にも役立つので歓迎されるべきである。しかし、漢語の移植にはそれなりの言語的・文化

的環境の整備が必要である。全ての漢語を日中言語の間で自由に移植することは現実的には不可能である上、混乱をきたすため、言語政策的に許されることでもない。異文化コミュニケーションの担い手としての翻訳者は、同形語に十分に注意しながら、日中交流に有利に持っていくストラテジーを講じることが求められている。

4. 文化面から見る日中翻訳の特異性

翻訳は、決して言語記号の一対一の置き換えではない。藤濤 (2007:10) は、「翻訳は複雑な要因が絡まったプロセスではあるが、異なる言語・文化間でコミュニケーションを成功させようとする具体的行為であると捉えると、翻訳に影響する要因を、言語の差、文化の差、コミュニケーション状況という3つの観点に分けて考察することが提案できるだろう」と主張し、言語差、文化差、そしてコミュニケーション状況から翻訳を捉えることを提案している。本章では、日中翻訳に影響を及ぼす日中間文化における特異性について見てみる。

日中交流ではよく、「一衣帯水の隣国」や「二千年以上の交流」、さらに「同文同種」とまで言われている。しかし、「一衣帯水の隣国」や「二千年以上の交流」は事実ではあっても、それは文化的同質性を意味するものではない。無論、これは日中だけに限ることではない。河原 (2018:7) は、「ギリシアとトルコはエーゲ海を隔てて向かい合っており、古代からの関係も深い、両国の文化、社会は全く異質なものである。インドと中東諸国家の関係も同様である」と例を挙げ、地理的隣接関係や歴史的交流が文化的同質性を必ずしも意味していないと指摘している。日中文化は、同質のように見えても、実は異質なものが数多くあり、つまり「偽友達」である部分が多いと言えよう。

文化の定義や種類について、必ずしも一致した見解は見られていないが、物質面などの表層文化から思考様式などの深層文化まで網羅するというには共通性がある。刘 (2016:24-30) は、翻訳者が原語に秘められた文化的情報を徹底的に解析する必要性を主張し、文化を以下のように分類している。

第一層：物質的形態層（生産・生活道具及び人々の衣食住に関係する物質文化）

第二層：典章制度層（社会秩序を維持するために作り出された規約や体制、機関）

第三層：行為習俗層（歴史的社会的に定められた行動様式や風俗習慣）

第四層：心理（心智）活動層（感知・認知・感情・思考様式・価値観・美的意識等知的活動）

そして、以上4つの文化層が、第一層から第四層へ行くほどレベルが深まり複雑になっており、それに対する理解も難しくなっていくとされる。

日中間では、たとえ行動様式や認知活動のような深層文化まで行かなくとも、日常生活レベルにおける違いは一目瞭然である。「餃子」は日中ともにある食べ物ではあるが、日本の餃子は焼いて食べるおかずであるのに対して、本場の中国では水餃子が主流で、主食である。「和尚」は日中共有の漢語で仏教の修行者を意味するが、日本の和尚は肉も酒も結婚も禁じら

れていないのに対して、中国では完全に禁じられている。「たぬき」は中国にもある動物であるが、日本では商売繁盛や恋愛結婚の縁起物として可愛がられているということは、日本事情に詳しくない中国人には通じない。日中間では、物質的文化層においてある程度類似していることがあっても、第二、三、四層文化まで行くと、その違いは特に顕著になる。名護市辺野古の米軍新基地建設問題を巡って、地方の一自治体である沖縄県が日本政府と対立して訴訟にまで至ったということは、日本人にとって特に不思議ではないが、中央集権制の中国ではまずあり得ないことである。思考様式や価値観、美的意識など第四層になると、日中間における文化的な隔たりは簡単に乗り越えられるものではない。

文化の差は、どの国家間にも存在する現象である。異文化コミュニケーションにおいて、文化の差が大きいと認識されるほど、それが重視され、その分カルチャーショックが軽減される。それに対して、文化的に同じ或いは近いと認識されるほど、その差は見逃され、その差による衝撃は予想以上に大きくなる。日中間では、前述したように、地理的隣接や遠い昔からの交流に起因する、文化的同質性或いは近似性というステレオタイプは、日中両国民に何かの形で刷り込まれているようである。そして、日中間のこの似て非なる文化、つまり文化上の「偽友達」現象は、見えない形で日中間コミュニケーションの摩擦を増幅させかねない。

日中文化に対するこのような認識不足は、日中翻訳従事者にも見られ、日中翻訳の現場に反映されている。

例 9 :

原 文 : 花見

原訳文 : 花見 (賞花)

上例は、平成 26 年 3 月に公表された国土交通省観光庁作成の『観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン』における日中対訳例である。「花見」は中国語に「花見 (賞花)」に訳されている。「花見」という漢語は中国語にないため、そのまま中国語に借用するという翻訳の技法はまず問われる。それは別問題とし、「花見」を「賞花」に訳すると、「花見」の文化的意味が中国語では表現されない。「花見」は、日本文化では「桜の花を觀賞するために野山に遊びに行く行事」(『世界大百科事典 第 2 版』)であるのに対して、中国での「賞花」の対象は、花一般を指している。それゆえ、「賞花」に訳されたら、桜に対する日本人の特別な感情は消し去られることになる。そして、このような文化的差異を見逃した翻訳が積み重なると、日中文化間の隔たりの拡大にもつながり、真の日中文化理解の達成には障害にもなるだろう。

例 10

原 文 : (浅草寺は)「浅草の観音様」の呼び名で親しまれ、境内では、ほおずきや羽子板などの市がたち、多くの人でにぎわいます。

原訳文 : (浅草寺)被大家亲切地称为“浅草的观音”，域内举办有酸浆、毬球板等集市，

人来人往，好不热闹。

この訳例は、東京都のある区の総合観光ガイドブックにある日中対訳例である（下線は筆者による）。「ほおずきや羽子板などの市」は、そのまま中国語に直訳されている。しかし、文化的背景の異なる中国人読者には、ほおずきと羽子板はイメージできても、なぜ「ほおずきや羽子板などの市」が立つのかがわからないだろう。日本のほおずきには、虫の気を去るという言い伝えや、死者の霊を導く提灯という文化的意味を伴っているのに対して、中国でのほおずきは一種の果物としてしか認識されていない。また、羽子板は中国伝来と言われ、現に今の中国でも遊びの道具としてあるが、日本の羽子板は、正月の厄祓いの魔除けとして女性に贈る飾りものでもある。

日本と中国は文化的に同質、あるいは近似だと思われがちであるため、日中翻訳においては、その文化上の差異が無視される現象はまだ多い。そして、このような文化上の「偽友達」現象が、見えない形で日中翻訳、さらに日中交流をより困難な状態にしていると言ってもいいだろう。

5. 終わりに

本研究では、日中間翻訳の特異性として、同文同種という言葉的・文化的なステレオタイプ、すなわち「偽友達」現象を検討した。そして、それは日中翻訳をより困難なものにするだけでなく、日中両国の真の理解を妨げるものにもなりかねない。日中翻訳に携わる者は、他言語間翻訳よりも警戒感を持って日中翻訳に当たる覚悟を持たなければならない。

楊（2016:136）は、特に文化的要素の翻訳に当たっての「研訳法」を提案し、「研訳法は、研究的な翻訳方式で、“訳”と“釈”の融合であり、その重点は“釈”にある」と主張している。「研訳」は文字通り、研究した上で訳出することである。「研訳法」には、まず翻訳に対する真剣な態度が強調される。翻訳者は、異文化コミュニケーションの仲介者でもあるため、原文にある言語的・文化的要素を正しくかつ機敏にキャッチし、そして、両言語・文化間の差を正しく評価した上で適切なストラテジーを取ることが求められている。

日中翻訳は、言語的にも文化的にも似て非なる要素が特に多いため、同文同種という幻想を捨てる勇気と叡智が何よりも大切であろう。

【注】

1. 本論文での、中国語の引用文に対する翻訳は、全て筆者によるものである。
2. 本論文での、言葉の意味に対する解釈は、特別な説明以外に、日本語は全て『新明解国語辞典』（第7版）により、また中国語は、全て『現代汉语大词典』による。

【参考文献】

【和文文献】

- 王承云（1998）「同形異義語における中国語と日本語の対照研究—中国語教育の視点から—」『人文科教育研究』25.
- 大河内康憲（1992）「日本語と中国語の同形語」『日本語と中国語の対照研究論文集（下）』くろしお出版.
- 河原昌一郎（2018）『日中文化社会比較論』彩流社.
- 金田一京助，大石初太郎，野村雅昭，佐伯梅友（2001）『新撰国語辞典』第8版小学館.
- 国土交通省観光庁（2014）観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン.
<https://www.mlit.go.jp/common/001029742.pdf>, (参照日 2021年9月13日).
- 在中国日本大使館.https://www.cn.emb-japan.go.jp/itpr_ja/00_000525.html, (参照日 2021年11月20日).
- ジェレミー・マンデイ著，鳥飼玖美子訳（2012）『翻訳学入門』みすず書房.
- 新村出編（2018）『広辞苑』第7版岩波書店.
- 鈴木孝夫（1975）『閉ざされた言語・日本語の世界』新潮選書.
- 中村明（2002）『日本語のコツ』中公新書.
- 日立デジタル平凡社（1998）『世界大百科事典』第2版平凡社.
- 藤濤文子（2007）『翻訳行為と異文化間コミュニケーション』松籟社.
- 文化庁(2007)『漢字出現頻度数調査について』.
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/nihongokyoiku_hyojun_wg/04/pdf/91934501_08.pdf, (参照日 2021年11月18日).
- 山田忠雄，柴田武，酒井憲二，倉持保男，山田明雄，上野善道，井島正博，笹原宏之（2012）『新明解国語辞典』第7版三省堂.

【中文文献】

- 敬恩（1980）「善于对比不同语言的特点是掌握翻译技巧的重要方法」『日语学习与研究』1980年02期.
- 雷鸣（2010）「基于文化意义的中日同形词研究」『贵州社会科学』2010年第11期.
- 刘宓庆（2016）『文化翻译论纲』中译出版.
- 潘钧（1995）「中日同形词词义差异原因浅析」『日语学习与研究』第3期.
- 施建军（2013）「中日同形词共时比较研究的现状及存在的课题」『东北亚外语研究』第1期.
- 唐京京（2006）「日汉翻译中的难点」『天津职业院校联合学报』第8卷第6期.
- 现代汉语大词典编委会（2007）『现代汉语大词典』上海辞书出版社.
- 许钧（2009）『翻译概论』外语教学与研究出版社.
- 杨仕章（2016）「文化关键词翻译研究」『解放军外国语学院学报』第39卷第1期.
- 中国知网. <https://cnki.net>, (2021年3月12日更新).
- 钟玉秀（1996）「日、汉翻译中的几点思考」『解放军外国语学院学报』第3期（总第81期）.

Specificity of Japanese-Chinese Translation

—Based on the Japanese-Chinese Translation of Tourist Materials

Wei Gong

Abstract

While all translations have some things in common, there are also peculiarities in translations between specific languages. Research into specificity can also contribute to predicting and avoiding potential errors in interlinguistic translation. In this study, we examined examples of Japanese-Chinese translations of tourist materials and highlighted the illusion of linguistic and cultural identity as a peculiarity of Japanese-Chinese translation, making Japanese-Chinese translation more difficult than translation between other languages. Therefore, it is necessary for us to adopt a more serious attitude, and the “translation after research” is suitable when engaged in Japanese-Chinese translation.

Key words: Japanese-Chinese translation, specificity, the same race and the same script,
translation after research